映画「痴呆性老人の世界」をみて

日本映画／一九八六年作品
カラー／スタンダード
上映時間八四分／九巻／二二九四m
岩波映画製作所配給
エキプ・ド・シネマ提供

○痴呆性老人に対して、いかに看護を行っていったらよいかという点で、大いに参考になりました。

ヒサゴ　トシキ（学生）

○ちゃんと準備をよくしてほしい、みんなの時間をムダにしないで下さい。一分とぎれても、七〇人いれば七〇分が失われるのです。どんなに内容がすばらしくても、その内容が半減してしまいます。

嶋崎　智美（学生）

○もっと身近かな公民館あたりで多くの人に見せてほしい。私は今父が同じ様になっているので笑ってはとても見れませんでした（笑っている人がいたけれど）。

この映画はいい場面が多く、家族子どもその兄弟どうしの生活面、嫁としての苦労など、もっと多くの人に見せて下さい。

並河あや子（パート）

○老人のペースの大切さや、説得より納得という点にとても共感しました。自分の都合で知らないうちに自分のペースに相手を合わせようとしなかったか……。

ふり返る機会になりました。

田部　清美（看護婦）

○「せいり」ってなんだろうと思った。十八才が十六才になったのがおもしろかった。

関谷　稔（小学四男）

○わたしは、ちほうせいろうじんのえいがをみて、さいしょのほうをおぼえていないでずっとまえのをおぼえているのは、わたしたちとはんたいです。

関谷　茜（小学二）

○おばあさんたちは、かわいらしくさえみえました。おじいさんたちは、一人ぼっちでどこか、うつろで、楽しそうにみえない。私自身男なのですが、男は、一人ぼっちのことが多いし寄り合っての世間話はあまりしませんしね。いい人間関係が持てるようになりたいですね。

武者　一雄（事務員）

○幸せな老人達だと思いましたが、映画を見ていてそう思うことにすぎないと思うとやっぱりむなしい。世話する人達のエネルギーをどう評価したらいいのか、とも思う。ボケないうちに死ぬ方法を考えています。しかしボケないようにいろいろがんばっています。

片山　一郎（無職）

○私も看護・介助のお手伝いをしている者として非常に考えさせられる映画でした。患者さんの行動に忙しい中、どの様にしてその患者さんの欲求を満たしてあげられるか本当にあらためて考えさせられました。

○母が八二才で入院中、ボケの進行が目に見えてきており、どう扱うか強い関心をもちました。母と同じだとつくづく思いました。説得でなく納得――何かすくわれたような気がしました。

高橋　慶治（無職）

○人間の生から終末までに接していますので大なり小なり痴呆性老人の問題は、必ず通る道です。大変勉強になりました。

井沢　和恵（保健婦）

○私どもの会（新潟県保険医会）でも老人性痴呆の勉強会を行って参りました。

どうしても避けて通れない問題で、これからも医療関係者だけでなく、全ての人々が関心を持たなければならない現実であり、この映画は一つの参考になりました。

箕輪　孝（医師）

○これからの老人看護する人も、される人もたいへんだと思うが、この病院のように本当にゆったりと患者さんの立場にたって看護出来たらお互いに幸せと感じる事もできるのでは、とうらやましく思いました。

でも現実には、この映画の様には、なかなか出来ないのでは――。もっと親身になって看護しなければと強く思いました。

井上　トイ（看護助手）

○家にも九四才の母がいます。家族関係がよいのかこんな重症でないのを喜んでいます。お世話する人達に感激しました。

内容のある映画で自然に涙が出てきました。ありがとうございました。

須貝　チエ（教員）

○人間として老人も障害者も大切にされる社会をつくりましょう。私自身説得でなく納得を心がけなくてはと反省。久しぶりに良い映画をみた。

高橋　初枝（白山作業所）

○みんなあたたかい心でめんどうみてるのに感心しました。

和田　英（寮母）

●解説● 映画・「痴呆性老人」の世界

いま、日本は非常な勢いで、高齢化社会を迎えつつあり、さまざまな問題がおきている。痴呆性老人の問題もそのひとつである。しかし、その対応はまだ手さぐりの状況にある。

痴呆とは何か。痴呆性老人とはどのような人びとで、いかに対処すべきか。この映画は、ある施設に収容されている痴呆性老人たちの姿を通して、一般の人びとの理解を深め、またこの問題に直面している人びとの助けとなることを願って製作したものである。

1985年度毎日映画コンクール教育文化映画賞受賞
1985年度キネマ旬報ベストテン文化映画部門第1位
日本映画ペンクラブ1985年度映画ベスト5
ノンシアトリカル部門第1位